

【平成19年度入学式】

「自己の殻を破り 大きな夢描こう」—日高学長式辞



新入生の皆さん、大学において何を修得しようとしていますか。とくに専修大学において勉学する意義はどこにあると思いますか。おそらく、まだ深くは考えていないだろうと思います。

私も、皆さんと同じように、昭和41年にここ、日本武道館において専修大学の入学式を迎えました。当時は、故郷の宮崎から東京まで、車で27時間かかりました。宗太郎峠を越えて日向の国の外に出て行くことは外国に行くみたいなきらみがありました。その反面、自分を見つめ、大学で何をすべきかを考える時間がありました。しかし、今振り返ってみると、大学の本質論には考えが及ばず、専修大学の歴史や伝統の重みを知らない状態でした。これらの事柄を深く考えるようになったのは、大学で勉学するようになってからです。刑法の研究者としての道を歩くようになってからは、伝統ある専修大学で勉学できたことに感謝し、自信と誇りを持ちました。

大学は高等教育機関であり、言うまでもなく、深く真理を探究し、専門的な知識やスキルを教授する場です。18歳人口の約50%が大学に進学する、いわゆるユニバーサル教育の段階に入っている昨今では、大学の中心的な部分の変容しつつあるようにも思われますが、決してそうではありません。高等教育の機能が多様なものになってきたのです。

大学間競争の時代を迎えた現在、大学教育の個性化を図り、特色を持たせることが求められています。これからは、大学により、研究に重点を置くもの、総合的教養教育に重点を置くもの、あるいは高度専門職業人養成を行うものなど、高等教育機関に機能的な分化が生じることになるでしょう。私学の場合、ここでの判断を誤ると、大学の将来像が歪んでしまいます。本学創立の原点に立ち戻り、建学の精神を21世紀に生かすという視点から、担うべき高等教育の役割を見定めなければなりません。

本学の創立者である、彦根藩士・相馬永胤、薩摩藩士・田尻稻次郎、幕臣・目賀田種太郎、桑名藩士・駒井重格の4先生は、明治維新前後の動乱の中を生き抜き、強靱な精神力をもってアメリカに渡り、コロンビア、エール、ハーバード、ラトガースの大学で法律学や経済学を勉学し、約8年間にわたる留学を終えて、明治13年に専修大学の前身である「専修学校」を創立しました。

創立者たちは、明治維新前後の動乱の柵(しがらみ)を捨て、困難極まる留学生活の中で、祖国日本の国の形を考え、帰国後何をなすべきかを考えたのです。彼らが修得した法律学や経済学の専門教育を突破口として、市民レベルから、社会の骨格を支える有為な人材を育成しようとしたのです。しかも、専門教育を日本語によって行うことを始めたのです。そこには、日本語によって議論することを可能にしなければ、規範意識や価値体系を変動させることはできず、日本を近代国家に生まれかわらせることはできないという、熱い思いがありました。

この創立者たちの建学の精神を今の時代に花開かせるために、本学は、21世紀ビジョンとして「社会知性の開発」を掲げました。さらに、「学生を基本に据えた大学づくり」を念頭において、教育・研究に取り組んでいます。

本学は、21世紀において、社会の諸課題を発見しそれを主体的に解決していく知的能

力を持った人材を育成するとともに、社会の発展の方向性を示しうる知の発信を行おうとしています。高等教育機関としては高みを望み、研究と教育を分断することなく、研究に裏付けられた教育を行い、社会知性を身につけた学生を育てていく所存です。

新入生の皆さん、専修大学は、私学として誇りうる128年の歴史と伝統を持っています。しかも、社会知性の開発という観点から混迷した今の社会に光を当てようとしています。大学は、どこの大学に入ったかではなく、大学で何を修得したかが問題です。学部学生であれば、これからの4年間をどう過ごし、何を体得したかが皆さんの30年後の人生を決定します。偏差値の呪縛を解き放ち、自己の殻を破って、大きな夢を描き

ましよう。大学院生であれば、研究分野のど真ん中に深い井戸を掘って密度の濃い研究をすることが、将来の飛躍のバネとなるでしょう。法科大学院生であれば、本学のあるべき法曹像である「社会生活上の医師」としての法曹を目指し、法技術だけでなく法曹倫理を身につけ、人の痛みの分かる法曹になるかどうかを決め手になりましよう。

皆さんの行く手は光に充ちています。語るべき歴史と伝統を持った専修大学で勉学することに誇りと自信を持ち、これからの大学生活によって大きく変身されることを期待し、私の式辞といたします。〈要旨〉

「活力ある4年間に」—学部長からのメッセージ

「摩訶不思議」の世界へ

経済学部長 室井義雄



ご入学おめでとう。元来、「University」(大学)という言葉には、宇宙・統一的世界・普遍・博識・自由自在など、多様な意味合いが含まれています。そして、「Economy」(経済)という言葉もまた、多義的です。節約・有機的統一・理法・家政・神の計画など、多様な含蓄があります。

大学生としての皆さんは、まず、この摩訶不思議な多様性の世界に迷い込んで下さい。この「迷路」から抜け出すための小旅行、まさにそれが、大学という「時間=空間」なのです。学問の何たるかを洞察し、また自己の存在理由の何たるかを見いだして下さい。

この学生時代に、大空を飛び交う「鳥の眼」と、地上を這い回る「虫の眼」を併せ持つ国際人として、大きく成長されるよう、期待しています。

「大学」は諸君の要望に応える

法学部長 木幡文徳



入学おめでとう。やや辛口で恐縮ですが、大学は、諸君の精神・身体に何かを覚えこませ、諸君を何者かに仕立て上げようとする場所ではなく、諸君自身が何者かになることを志した時に、諸君の目的達成のために人的・物的支援をする場所であることを理解してほしいのです。

そのために専修大学は完全とはいえないまでも、かなりの程度の人材と設備を用意して、諸君に利用されることを待ち望んでいるというわけです。あたかも、専修大学生であることが不本意であるかのごとき不満をもらされる方がいるやに聞くことがあるのですが、そのような人こそ自己の要望を大学に求めてみて下さい。きっと応えてくれるはずです。

諸君の専修大学での生活が、活力に満ちたものであることを祈ります。

「考える訓練」がステップに

経済学部長 廣石忠司



大学に入学してとまどうことの一つに、勉強の仕方が違うことがあります。高校までの勉強というと、おそらく知識を記憶することだったのではないのでしょうか。

大学では違います。自ら情報を集め、それを分析し、一つの結果にまとめて発表することが求められます。一言で言えば「考えること」が勉強と言ってもよいでしょう。

大学の4年間は考える時間でもあります。勉強だけではありません。サークルの運営、その他さまざまな社会的活動を通じて「考える」訓練を積んで下さい。それが次のステップ—就職・起業など—につながっていくのです。

4年間での見違えるような成長を期待します。

「器の大きな人間」目指せ

商学部長 川村晃正

新入生の皆さん、入学おめでとう。君たちの心を1日も早く、高校ヴァージョンから大学ヴァージョンに切りかえて下さい。



切りかえのポイントは、勉学をはじめ何事においても主体的に立ち向かう姿勢です。目標を持って主体的に「考え」「判断し」「行動し」たとき、そこで得たことは君たちを「器の大きな人間」にします。専門科目ばかりでなく、教養科目の勉強も必要です。また、先生や先輩、友人とのコミュニケーションも大切です。「器の大きな人間」になるために人は「学ぶ」のです。このことを忘れずに、大学で用意された知的財産、優れた教授陣、施設や制度を活用して、自分を磨いて下さい。

これからの4年間でどう過ごすかで、君たちの未来は決まるのです。

おのれの可能性に挑戦を

文学部長 矢野建一



ご入学おめでとう。皆さんの入学を教職員一同心から歓迎します。これからの4年間はこれまで皆さんが経験してこられた高校生までの生活とは大きく異なります。カリキュラムも時間割もお仕着せのものではなく、すべて自分で選択し、自分で組み立てなければなりません。すなわち大学の4年間は、なにを学ぶのか、どのように学ぶのか自分で決定するところです。その限りで自由な時間が与えられますが、それは決して放埒(ほうらつ)なものではありません。

自己の選択には必ず自己責任がともないます。しかし諸君の側には何でも相談できる教員や職員そして友人がいるはずで、悩むことを厭わず、韜晦(とうかい)することなく、おのれの可能性にチャレンジしてみてください。専修大学は必ずや皆さんの期待に応えてくれるはずで、

相性よい分野を見出そう

ネットワーク情報学部長 齋藤雄志



大学は皆さんが社会に出るための大きな弾み台である。自分自身を見つめつつ、さまざまな知識を学習し、自分の目標を定めるために、大学は大いに役に立つ。これには4年間という時間的要素も大きい。人生でこれほど自分の方向をゆっくり見定めることができる時期は、そう多くはない。

厳しい競争下にある企業の中に身をおけば、明日、あさつてのために必死に仕事をせざるを得ないが、今はまだ時間がある。そのためには何をしなければならないか。

まずは自分と相性のよい分野を見だし、それに関する知識を得ることである。アンテナを張り、関心ある分野の先端的な知識を得よう、努力してみよう。きっと正しい進路を決める上で役に立つ。